

公益財団法人京都 Y M C A

2023 年度事業報告

2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日



公益財団法人京都YMCA

〒604-8083 京都市中京区三条通柳馬場東入中之町2番地

2023 年度事業報告

2023 年度年間聖句

雨も雪も、ひとたび天から降ればむなしく天に戻ることはない。
それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ種蒔く人には種を与え食べる人には糧を
与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもと
に戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げわたしが与えた使命を必ず果たす。

旧約聖書 イザヤ書 55 章 10 節～11 節

2023 年度事業計画

自然体験や、スポーツ活動、文化活動を通して、プログラムに参加する一人ひとりの全人格
的な成長を促し、健やかな心と体を育みながらたくましく成長をはかる活動を展開する。
プログラムを通していのちを守ることの大切さを学ぶとともに、生涯にわたって生き生きとし
た人生を歩み、社会の一員として貢献できるように指導する。

- ① 公益性の検証と再確認を進めながらプログラムの改善を行う
- ② 中長期的事業計画（持続可能性）を見据えた事業の取捨選択と改編をおこなう
- ③ 新たなニーズに応じた新規事業開発に着手する
- ④ 地域ニーズに応じた事業の計画と実施

こどもから大人まで全ての人がボランティアを通して地域社会ならびに国際社会に貢献する
ことができるように、ボランティアを育成し、ボランティアの手による地域社会および国際社
会への貢献事業を進める。

- ① ボランティアの募集と活動の活性化によりボランティアを増強する
- ② YMCA活動の公益性を周知するための広報活動を強化する
- ③ ボランティア活動を持続可能なものとするための寄付金の拡大に取り組む
- ④ デジタル化によるオンラインプログラムの取組を行う

乳幼児の成長過程において必要な情緒的、身体的、知的体験教育を、保育事業を通じて統合
的に推進するとともに、共に支え合う地域社会の実現を展望しつつ、子育てボランティアの育
成なども含む広範な子育て支援事業を展開することで、乳幼児期のこどもたちの健全な成長及
び発達を促す。

- ① 地域の子育て支援の拠点として未就園児を対象とした子育て支援プログラムの実施
- ② こども子育て支援事業のさらなる安定的運営のための整備を行う
- ③ 他部門との協働を通じて保育人材の安定的確保と保育士のスキルアップを図る

2023 年度を振り返って

2023 年度はコロナ禍の影響もほぼなくなり通常の業務が戻ってきているように見えるが、完全にコロナ禍の影響から脱却できたわけではなかった。スイミングスクールで参加者の回復を試みたが特に新年度当初の募集において低年齢層の参加者が伸びなかったのは、少なからずコロナ禍の影響がうかがえた。

しかし、スイミングをはじめとしたスポーツプログラムの大会や試合などもコロナ禍前と同様に開催されるようになり、コロナ期間中実施できなかった視覚障がい者手引き講習など地域でのサービスプログラムやチャリティーラン、バザーなども以前と同じように実施できるようになった。

しかし、コロナ禍で中止やオンラインなど形態を変えて実施したものなどは、プログラム再開しても参加者や関係団体とのつながりを同じように回復することの難しさを感じた年であった。

〔公1 こどもから大人までの健全な心身の発達を促進するウエルネス事業〕

5 月中旬より新型コロナが 5 類に移行され、ウィズコロナからポストコロナの社会情勢により、様々な事業を対面で再開することができた。これにより、人と人との交わりをリアルに感じ、その大切さを再確認することの喜びを感じることもできた。一方で、人々の感染対策意識へのゆるみの影響か、特に秋から冬にかけては新型コロナにとどまらずインフルエンザの流行にも影響を受けた一年となった。

各競技の大会については、スイミングでは水球チームが様々な大会に出場し、好成績を収めた。全国大会については会場が大阪で参加人数も多く見込めたが、台風の影響を受けて規模縮小、欠席が増えたことが残念であった。毎年恒例のクリスマス会は 3 部制に戻り多くの子どもたちの参加を得られた。

体操教室、サッカー、バスケットボールは例年通りの事業展開を行ったが、特にバスケットボールはプロバスケットボール B リーグの京都ハンナリーズの試合の招待を受け、プロのプレーを間近で見ることができて多くの感激と学びを得ることができた。

野外活動では、昨年度までのソロテント利用からコロナ前までの様に大型テントでの宿泊も再開し、これまで通りのよりダイナミックな活動を展開することができた。

夏季キャンプについては 2022 年度に夏の新たな拠点として利用した舞鶴市内にある旧神崎小学校の利用ができなくなり、リトリートセンター中心のキャンプ展開となった。

病気の子供とその兄弟姉妹を対象とした「青い空と白い雲のキャンプ」は、3 年ぶりに 8 月に実施することができた。また、今回で 20 回目の開催を記念して、参加者からの要望に応える形で冬季（2 月）にも開催し、8 月よりも多くの子どもたち（15 名）の参加を得て、雪あそびを中心とした新たな活動を行うことができ、次年度以降も継続して実施することとなった。

〔公2 ボランティアによる地域社会及び国際社会への貢献活動〕

2023 年度も府民を対象としたいくつかの地域サービスプログラムが、ボランティアの会員により行われた。

前年に引き続き、子どもの貧困問題へのアプローチとして「夏の思い出を等しく子どもたちへ」キャンペーンを行った。これは、経済的格差がもたらす体験の格差を少しでもなくそうと経済的な理由でキャンプ等の課外活動に参加することのできない家庭の子どもたちに市民から集めた寄付を使って支援する取り組みで、このキャンペーンで5名の子どもたちが夏の海や山のキャンプに参加することができた。

コロナ禍で子どもたちが集まって実施することのできなかった国際協力街頭募金を久しぶりに YMCA のプログラムに参加する子どもたちや、専門学校の留学生と多くの YMCA の会員、ボランティアなどが一緒に市内 7 か所に分かれてウクライナ、パレスチナなどへの支援協力を呼び掛けた。

その同じ日には、障がい者支援の活動として、京都 YMCA の視覚障がい者への朗読ボランティアなどを行っているグループの協力を得て、中京区民ふれあいまつりで「視覚障がい者手引きの講習会」を行い、中京区民の方々に視覚障がい者への理解をひろげ、手引きについての講習を行うことができた。

11 月には YMCA が行う障がいのある子どもたちのためのプログラムの支援を行うインターナショナル・チャリティーランを行った。89 名のランナーが参加し、86 名のボランティアが大会の運営に関わった。

2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震の被災地支援として、全国の YMCA が協力して金沢の 1.5 次避難所、輪島の避難所の運営のサポートなどを行うこととなった。金沢の 1.5 次避難所には、京都 YMCA からスタッフを 1 名派遣した。また京都府災害ボランティアセンターにもボランティアを派遣して被災地復興支援を行った。また、被災者支援活動のために全国の YMCA で緊急募金を集めることとなり、京都 YMCA でも 1 月 21 日に、会員、ボランティア、京都府災害ボランティアセンター、京都 YWCA ボランティアとともに市内 4 か所で被災地支援街頭募金活動を行った。

毎年 2 月に全国の YMCA で取り組んでいるいじめをなくすキャンペーン「ピンクシャツデー」の取組として、前年に続いて子どもたちからいじめをなくすことを呼び掛けるポスターを集めて展示する取り組みを行った。京都市教育委員会の後援を得て、近隣の小学校に呼びかけたところ、今回も 100 枚を超えるポスターが集まり、チャリティーバザーの日に合わせて館内で展示し、バザーに訪れた多くの方々に見てもらうことができた。

リトリートセンターを利用したの様々なイベントをボランティア会員の企画、運営協力を得て実施し、子ども達、その家族が参加し、自然の中で、さまざまな体験を通して交流することができた。またリトリートセンターの整備のために定期的にボランティアのグループが、施設の整備、改善を行っている。

12 月にはリトリートセンターを会場に文部科学省「体験活動等を通じた青少年自立プロジェクト」（子供たちの心身の健全な発達のための自然体験活動推進事業）から委託を受けて小学生を対象にアートキャンプを行った。

〔公3 子育て支援事業としての保育園〕

開園3年目の高倉おさなご園（分園）は、1歳児～2歳児8名の園児を受け入れ、保育士3名での保育を行った。今年度は、食物アレルギーや発達に特徴のある子どもたちが多く、丁寧かつ保育士のスキルを求められる運営となった。

またおさなご園では災害時での避難など緊急事態での対応の難しさがあり、近隣店舗や住人へのさらなる声掛けを行ってきた。

YMCA三条保育園（本園）は、開園6年目を迎え、分園と共に保護者の働き方、子どもたちの個性や困りごとに向き合い、多様な生き方、必要性に応じた子育て支援としての役割を担っている。特に今年度は家庭内での問題ごとに関する公的機関からの問い合わせが多くあり、より細やかな保護者対応を求められた。これらのことから現代の保護者が抱えている孤立感への支援の必要性も強く感じられる。

地域子育て支援事業として取り組んでいる保育園に入っていない乳幼児と保護者に向けての「Y わいひろば」では、感触遊び、運動遊び、異年齢児交流、育児相談を引き続き行ってきた。そこから入園へ繋がるケースが今年度は4組あった。また、校区児童館主催の夏祭りに5歳児が「お店屋さんごっこ」として出店し、良い経験を重ねた。毎年行っている京都YMCA国際福祉専門学校日本語学科の留学生との文化交流は子どもたちが楽しみにしている事業となっている。

京都YMCA所有の宇治リトリートセンターでの野外活動、礼拝、親子遠足のほか保育バスや公共交通機関を使って、芋ほり体験、京都市動物園、京都水族館、八瀬野外保育センターなど園外保育を楽しんだ。

この年から中京区子ども大会に初めて5歳児が参加して、他園との交流の良い機会となった。

園児が今しかできない経験を豊かに続けていけるように、日々の保育の中で保育士が保育者対応の振り返りやスキル向上のための研鑽をとおして多くの気づきを経験し、より良い生活について子どもたちや保護者と共に考える機会にめぐまれた1年となった。また、職員のスキルアップのために外部講師による造形表現の研修や、京都YMCAの他部門のスタッフから救命活動の学びの機会を持った。2023年度は、地域に目を向けて、近隣の児童館との連携や中学生チャレンジ体験学習の受け入れや、ワイズメンズクラブからの支援を受けての通して子育て支援事業としての機会を少しずつ広げて来た1年であった。